

## 日本の神話と歴史

——目頼子と雉鳴女、天若日子と毛野若子——

夜 久 正 雄

### (1) 目頼子と鳴女

副題の「目頼子」は歴史上の人物の名で、「鳴女」は神話に登場する雉の名である。

目頼子といふ人物は、継体天皇二十三年（西暦五二九年）冬十月、任那に派遣された使者・伝令である。彼または彼女は任那にあつた百濟救援軍六万の総指揮官毛野臣（けののおみ）を日本本国に召喚する勅命を伝へるために渡海した、まぎれもない歴史上の人物である。（『日本書紀』『継体天皇紀』）

雄 雉の「鳴女」といふのは、神話に登場する雉で天照大御神・高木神の勅命を伝へる伝令となつた。『古事記』上巻および『日本書紀』神代巻の中に出てくる。天孫降臨に先立つて、高天原と葦原中国との交渉があつた。その時、天照大御神・高木神の命令によつて葦原中国平定のために遣はされた天若日子（あめのわかひこ）といふ英雄神があつた。この神は豪傑で、葦原中国を自分で支配しようとして「八年に至るまで復奏」（かへりこ）（『古事記』）しなかつた。その天若日子召喚の命を受

けて高天原から葦原中国に伝令となつて飛んだ雉が、「鳴女」といふ名前だったのである(『古事記』)。これは雉であるが、神話の中で、人間のやうな働らきをしてゐる。紀の国から吉野へ神武天皇の道案内をしたあの八咫鳥といつたところである。高天原系神話では鳥が神の使者として登場する、これもその一例である。

さて、私の部屋に雉の剝製がある。見ると、つぶらな目のまはりが赤い色の頬で、頬の中に目があるやうにも見える。頬は古くは「つら」と言つて、顔のことをもいふやうになつた。「つらつきふくよかに」といふ言葉は、いはゆる豊頬で、平安時代の美人の形容である。剝製の雉を見てみると、つぶらな目と赤い頬が目立つて、「目頬子」といふ人の名前は、雉の顔から連想したのではないかと思はれた。

これは単なる思ひつきだが、さうすると、「継体天皇紀」の「目頬子」と神話の中の雉の「鳴女」とは、雉を伝令に見立てた同じ発想による名前ではないか、と思はれる。さう思つて、調べてみると、たしかに「目頬子」と「鳴女」とは一致するのである。そればかりか、神話の「天若日子」と「継体天皇紀」の「毛野若子」とも一致するところが多く、全体として、天孫降臨先駆派遣の神話物語と継体天皇紀の毛野臣派遣の歴史とがオーヴァラップするのである。

## (2) 天若日子と沙至比跪(「神功皇后紀」)

さて、天孫降臨の神話といふのは、『古事記』にも『日本書紀』にも記されてゐて、日本古典神話の中核的な物語である。一言で言へば、天照大御神の孫にあたるニギノミコトが、高天原から地上国家の葦原中国に降臨して、葦

原中国すなはち大八島国日本の統治者となる物語である。それには、その準備のために先駆として降された神々があつた。天菩比神と天若日子と建御雷神とである。

最初の天菩比神は「大国主神に媚びつきて三年になるまで」(『古事記』復奏しなかつた、といふのである。相手国の支配者たる大国主神に「媚びつきて」といふ——この一語は、対外屈従外交及び拜外思想の心理を洞察したものである。

次に天若日子が登場する。天若日子は「大国主神の女、下照比賣を妻とし、又其の国を獲むと慮りて、八年になるまで、かへりごと奏さざりき」(『古事記』)とある。

天若日子は豪傑で、相手国の君主の娘を妻としてその国を獲得しようとしたといふのである。「言向け和せ」といふ勅命を忘れた点では天菩比神と同じであるが、これは自己の野望を遂げようとする武断的独裁的の行為である。軟弱外交のあとに武断的強硬政策のくるのは歴史上にも例が多いが、後者も皇孫統治の使命を忘れた増長慢である点に於て、「地天を覆はんとする」(『憲法十七条』)不忠のそしりを免れない。かくて天孫降臨の神話は、建御雷命の登場を語るのだが、その根本思想は「かしこし仕へまつらむ」といふ一語によつてあらはされる「承詔必謹」「天覆地載」(『十七条憲法』)の純忠の精神に尽きるのである。ここには、対外関係に於ける卑屈と傲慢との心理の葛藤を一刀両断する、強い鋭い自覚と認識とがある。この物語を創造した思想は、深い外交体験と人生感覚をたたへてゐると思ふほかに考へやうがない。天孫降臨神話の前史とでもいふべき神々派遣の物語には国際折衝の体験が反映してゐるのではないか。神話の中では高天原と葦原中国——出雲と大和との交渉としてあらはれてゐるから大八島国の統一過程にあつた体験事実として伝承されてゐるが、そこには同時に国際関係の体験をも反映してゐるやうに思はれ

る。

本論は主として天孫降臨先駆派遣の神話と「継体天皇紀」との対応関係を論ずるので、詳しく説明できないが、最初に「神功皇后紀」との対応関係を略述しておく。派遣使節選定の方法について、紀には、

「時に皇太后（註・神功皇后）譽田別尊（註・応神天皇）新羅の使者を責めて、因りて以て天つ神に祈りて曰く『当に誰人を百済に遣はして將つて事の虚実を檢へしめん。当に誰人を新羅に遣はして其の罪を推問はしめん』と。天神誨へて曰く『武内宿弥をして議を行なはしめよ。因つて千熊長彦を以て使者とせば、当に所願の如くなるべし』と。是に於て、千熊長彦を新羅に遣はして、責るに百済の献物を濫したるを以てす」（神功皇后紀四十七年）

この『日本書紀』の叙述は、天照大御神・高御産巢日神が、葦原中国平定のために派遣すべき神を選定するのに、思金神をして思はしめたとするのによく似てゐるのではないか。

また、天若日子とよく似た「沙至比脆」といふ人物も登場する。「神功皇后紀」六十二年の本文に「新羅朝す。即年に襲津彦を遣はして新羅を撃たしむ」とあつて、『百済記』が引用してある。その中の「沙至比脆」が天若日子とよく似てゐるのである。

「壬午年（註・西曆三八二年）に、新羅、貴国（註・日本）に奉らず。貴国、沙至比脆を遣はして討たしむ。新羅人、美女二人を莊飾りて、津に迎へ誘ふ。沙至比脆、其の美女を受けて、反りて加羅國を伐つ。云々」  
そこで、加羅の国王の妹、既殿至が事情を訴へるため大倭日本に來朝した。

「天皇、沙至比脆を遣はして新羅を討たしめたまふ。而るを新羅の美女を納りて、捨てて討たず。反へりて我國を滅す」と訴へたといふ。そこで「天皇、大きに怒りたまひて、即ち木羅斤資を遣はして、兵衆を領めて加羅に來集ひ

て、其の社稷を復したまふといふ」とある。結局、沙至比跪は「免されざることを知りて、石穴に入りて死ぬ」ともある。

神話の天若日子の派遣とそつくりとは言へないが、「国を獲らん」とした動機と女性関係とその最後の運命とはよく似てゐる。

これだけでも、天孫降臨の先駆派遣の箇所と神功皇后紀の外征記事とは対応する箇所が認められるのである。

### (3) 毛野臣の派遣（継体天皇紀）と目頼子

継体天皇の六年（五一二年）、百済が使をよこして貢物を献じ、別に上表して、任那の国の上哆唎、下哆唎、沙陀、牟婁の四県の割讓を請願してきた。全羅南道全域にわたつてゐる。（日本古典文学大系『日本書紀』下巻付図「三韓略図」参照）

この請願に対して、哆唎の国守穗積臣押山が賛意を表し、大臣大伴金村が同意した。勾大兄——後の安閑天皇は反対なさつたが容れられなかつた。流言があつて、押山、金村が百済の賄賂をもらつたといふ。七年（五一三年）十一月、朝廷はさらに、己汶、滯沙を百済に割讓した。同月、任那の伴跛国が己汶の地を乞うたが許されなかつた。

八年三月、伴跛は南北に城を築いて、遂に新羅に侵入した。

九年、百済の使者文書將軍の帰るを送つて、物部連が舟師五百を率ゐて、帶沙の江に詣つたが、伴跛の襲撃を受けて敗れた。百済は、物部連を自国に迎へ、かつ大倭に使を出して友好を深めた。

十八年、百済の聖明王が即位した。

二十一年（五二七年）近江の毛野臣が、任那に派遣された。近江臣は建内宿弥の後裔といふ。

『日本書紀』に「近江毛野臣、衆六万を率て、任那に往きて、新羅に破られし南加羅・喙己吞を復し建てて、任那に合せむとす」とある。西暦五二七年にあたる。大陸はいはゆる南北朝時代で、北の北魏と南の梁との時代である。朝鮮半島は高句麗、新羅、百済、任那四国抗争の時代である。大和朝廷は、いはゆる神功皇后の新羅征討のあとを受けて、半島における支配権を保持しようとする努力をつづけ、しきりに大陸南朝と連絡しつつあつた。その一端を語るのが、雄略天皇の宋の順帝に送つた表文（四七八年）である。

二十三年春三月、百済王は下哆喇あつらの国守・穂積押山臣に語つて加羅の多沙津を乞うた。朝廷はまたこれを許したので、加羅の王は日本を恨み、遂に新羅に結んだ。加羅は任那加羅とも言はれて任那の一国と見られる。対外政策の失敗が遂に任那の一国を離反させたのである。

同月、朝廷は毛野臣を安羅の日本府に遣はして、新羅・百済に勅命を伝へしめた。

夏四月、任那国王が来朝して、大伴金村に乞うて、新羅征討を奏請した。同月、同王の帰国につけて、任那に在る毛野臣に詔して、任那の奏請を推問し、任那・新羅の和解をはからしめた。毛野臣は熊川に宿つて、新羅・百済両国王を召し集へた。ところが両国の国王は来ず、その臣下を遣はした。毛野臣はその無礼を責めて、遂に勅命を伝へなかつた。そのため、新羅の大臣は毛野臣の無礼を憤り、四つの村を侵略して帰国した。

秋九月、任那の使が来朝して毛野の臣の暴政を奏上した。天皇はその行状を聞かれ人を遣して召喚された。しかし、毛野臣は帰朝せず、腹心の従者馬飼御符を上京せしめて、使命を達せずして帰国するは恥辱であると述べ、復命

の期を待たれんことを乞うた。

任那王は毛野臣の性質を知つてしきりに帰朝をすすめたが、毛野臣が聴き入れないので、遂に新羅と百済とに兵を請うて毛野臣を討たむとするに至つたのである。

冬十月、調吉士が任那から帰朝して、さらに毛野臣の暴政を奏上した。

「故、目頼子を遣はして、徴召す」とある。

#### (4) 目頼子（継体天皇紀）と雉の鳴女（古事記上巻）

書紀の原漢文を現代語訳すると次のやうなことになる。

「冬十月、調吉士つきのましといふ人が、任那から連絡に帰国して朝廷に奏上することには『毛野臣は、性格が傲慢不正で、政治が下手である。しかも最後まで和解することなく（同盟国の）加羅の国を乱し、勝手気儘な行動をして、外患を防ぐことをしない』と報告した。そこで、目頼子を使として差立てて毛野臣を召喚した。」

このあとに細字の註があつて、「目頼子は未だ詳ならず」とある。『日本書紀』編纂の当時から、目頼子といふ人物がどういふ氏姓の人かわからないのであらう。何か伝説的な感じさへする人名で、それだからこそ神話の「雉鳴女」とうまく照応すると思はれるのである。

正 久 夜  
そのことはまた、ここに登場する毛野臣と神話の中の天若日子とのタイプがよく似てゐることも照応するのである。

神話の雉の鳴女の登場は次の通りである。

「かれここに天照大御神高御産巢日神、亦諸の神たちに問ひたまはく、『天若日子久しく復奏まをさず。又いづれの神を遣はしてか、天若日子がひさしく留る所由を問はしめむ』ととひたまひき。是に諸の神たち、また思金神まをさく、『雉名鳴女を遣はしてむ』とまをす時に、詔りたまはく、『汝行きて、天若日子に問はむ状は、汝を葦原中国に使はせる所以は、其の国の荒振る神どもを言向け和せとなり。何ぞ八年に至るまで復奏まをさざると問へ』とのりたまひき」(『古事記』)。

歴史上の人物である目頼子が持つて渡海した命令は紀には記してないが、恐らくは、右のやうなものであつたらう。

「言向け和せ」といふ至上命令は、敵国の説得の意味だと思ふ。具体的な内容はわからないが、毛野臣に対する継体天皇二十三年の詔に任那・新羅両国の「相疑ふことを和解あひまはしめよ」とあるのが対応してゐるとも見える。

『日本書紀』における目頼子の伝宣の結果は、毛野臣の帰国となるが、目頼子がどうなつたかは記してない。ただわざわざ「目頼子は未詳」とあるのは、密偵の意味なのか、その最期がわからないといふ意味なのか。いづれにしても、外地の將軍に敵しい勅命を伝える伝令が非常の危険にさらされてゐたことは想像できよう。鳴女が殺されたのがその例である。

また二十世紀の玄海灘渡海の危険や困難の程度が目頼子や鳴女の渡海の危険さや困難さと同じであるとは言へない。神話の伝令が雉になつてゐるのは、この渡海の困難さや危険さを痛感してゐた人々の鳥に対する憧憬のあらわれであらう。さう言へば、新羅の美術などに多く見られるあの飛雲や飛鳥や空を翔る天女や怪物など、日本と韓国との間によこたはる玄海灘を飛んでゆきたいといふあつい願ひのあらはれではあるまいか。日本から韓国に行つた人の望



郷か、半島の戦乱に疲れた人の大倭日本によせる憧憬か、——この目頼子や鳴女の話をしらべてゐて、新羅百濟などの、あの空飛ぶものに対する憧憬の美術の意味がわかつて来た。日本でも「天の鳥船」といふ。

さて、目頼子の最期はわからないが、鳴女の最期を古事記はかう書いてゐる。

「かれここに鳴女天より降り到きて、天若日子が門なる湯津楓の上に居て、委曲に天神の詔命の如言りき。爾に天佐具賣、此の鳥の言ふことを聞きて、天若日子に『此の鳥は、鳴く音甚と悪し、故射殺したまひね』と云ひ進むれば、即ち天若日子、天神の賜へる天之波士弓、天之加久矢を持ちて、其の雉を射殺しつ。爾に其の矢、雉の胸より通りて、逆に射上げらえて、天安河の河原に坐します天照大御神、高木神の御所に遠りき。是の高木神は、高御産巢日神の別名なり、故高木神、其の矢を取らして見そなはずれば、其の矢の羽に血著きたりき。是に高木の神『此の矢は、天若日子、命をたがへず、悪神を射たりし矢の至つるならば、天若日子に中らざれ。若し邪心しあらば、天若日子、此の矢にまがれ』と云ひたまひて、其の矢を取らして、其の矢の穴より、衝き返したまひしかば、天若日子が、胡床に寝たる高胸坂に中りて、死せにき。此還矢可恐之本也。亦其の雉還らず。故今に諺に、雉の頓使と曰ふ本是也。」

「雉の頓使」といふ、小馬鹿にした諺に、あやまら謬れて、この物語にこめられた無名の伝令の悲劇的最期を見落してはならない。目頼子について、書紀の筆者が、わざわざ「未詳」と書いたのは、それだけ高くこの人物を評価してゐたのである。鳴女を射た矢が、神のみ前に達して、天若日子の誅罰となつたのは、この使者の死が無駄ではなかつたといふ——いや、恐れなく詔を伝へた忠義の魂が、海を越えて故国に還つて、その使命を果したとする叙述なのであらう。

『日本書紀』には、この『古事記』の鳴女のやうな最期をとげた伝令を伝へてゐない。ただ、目頼子については、「目頼子、初めて任那に到る時に、彼に在る郷家等、歌を贈りて曰はく」として、

韓国を如何に言ことぞ、目頼子来る　むかさくる老岐の渡を、目頼子来る

といふ一首の旋頭歌をあげてゐる。これには躍動するリズムがあつて、待ちに待つた本国からの使ひが来た、といふよるこびがうたはれてゐる。鳴女と同じく目頼子が大きな役割を果したことに對する讃辭とも受けとれるやうである。歌に詠まれて歴史にのこるのは、永久にその名をとどめることになるからである。同じく半島における壮烈な最期をうたはれた大葉子（『欽明天皇紀』）に通ふものがあつたのであらう。

### (5) 天若日子の死と毛野若子の死

天若日子は、任地で死んだが、毛野臣は、目頼子の召喚によつて、帰国した。天若日子が任地で死んだことは、「神功皇后紀」の木満致や沙至比脆の最期と同じである。しかし、毛野臣の葬儀に、妻が歌をのこしてゐるのは、神話の天若日子の方と似てゐるのである。『日本書紀』には、その最後をこのやうに記してゐる。

「是歳、毛野臣、召されて對馬に到りて、疾に逢ひて死ぬ。送葬の時、河の尋に、近江に入る。その妻歌ひて曰く、

枚方ゆ　笛吹き上る　近江のや　毛野の若子い　笛吹きのぼる」

とある。

当時の記録であるから正確なことはわからないとしても、兵六万を率ゐて南鮮動乱の平定に向つた毛野臣は、凡庸

の武将であつたとは思はれない。むしろ猛将型の將軍といふべきで、任那に対して力を以て支配しようと臨んだやうである。この人物の類型は古事記神話の天若日子に対応するものであらう。天若日子が「その国を獲むとして八年に至るまで復言申さざりき」とあるのは、毛野臣すなはち「毛野の若子」にびつたりである。そのうへ、その死に當つて、妻が歌を詠んでゐるのも、神話の天若日子の最期とよく似てゐるのである。

(6) 神話と伝説と歴史との対応

かう見てくると、「継体天皇紀」の近江の毛野臣の外派遣の歴史は、天孫降臨の神話の天若日子の物語と対応してゐることがわかる。そのほか、「神功皇后紀」の沙至比跪さしひひこと天若日子、「継体天皇紀」の穗積押山ほつみのおしやまと神話の天菩比命あめのほひのみことにも対応関係が見られ、また神功皇后の三韓征討の折の建内宿弥たけうちすくみと天孫降臨の際の思おもひ金神かねかみとの間にも対応があるといへよう。さらにすこし飛躍させれば、思金神と大伴金村、建御雷神と物部鹿火ものべのあかひにも対応するところが認められるかも知れない。

以上を整理してみると次のやうなことになる。

(神話)

天孫降臨

天照大御神

思金神

天菩比命

(歴史伝説)

神功皇后三韓征討

神功皇后

建内宿弥

(千熊長彦)

(歴史)

継体天皇外征

継体天皇

(大伴金村)

穗積押山

天若日子

雉鳴女

建御雷神

沙至比跪（木満致）

毛野臣（雄略天皇紀及び顯宗天皇紀の  
紀生磐宿弥）

目頼子

（物部鉦鹿火）

かう見てくると、天孫降臨の神話と神功皇后の三韓征討の歴史伝説と継体天皇紀の外征の歴史には一貫したものが認められるのである。さらにそれは推古天皇紀に及ぶが今はふれない。神話と歴史伝説と歴史記述とは一貫したものがあり、それは三段の層をなして、歴史的現実の認識を表現してゐると思ふ。その意味で歴史は現在に對する認識であり、神話はその純化したものであると言へよう。天孫降臨の先驅派遣の神話は、外交交渉の困難さと問題解決の原理を示すものと見るべきである。

神話と歴史伝説と歴史の対応は、天照大御神とスサノヲノミコトとの交渉（神話）、ヤマトヒメとヤマトタケルノミコト（歴史伝説）、大伯皇女と大津皇子（歴史事実）との三者の対応関係にも見られる。そのほかにも、さまざまの対応関係が発見できるのであらう。その神話と歴史と一貫するところこそ古代日本の国民思想の中核があり、神話と歴史の中心テーマがあるのである。この歴史哲学を中大兄皇子（天智天皇）が「中大兄三山歌」（万葉集）に、「神代よりかくなるらし いにしへも しかなれこそ うつそみも」と表現されたのである。これが日本の神話・歴史のライトモチーフであつた。（拙稿「中大兄三山の歌と古事記の形成」『古事記のいのもち』）

（昭和四十八年八月二十一日脱稿）

（筆者は本学教授・国文学）